

新治小学校だより



ひびく心 はずむ体 見つめる目

～新治のよさを持続して生かしながら、
よりよい社会を創ろうとする子どもを育む学校を目指して～

令和4年度

12月号

令和4年11月30日



宿泊行事の再開と体験的な学習活動による学び

副校長 青木 直美

10月28日～29日に4・5年生が愛川宿泊体験学習に行ってきました。修学旅行に続いて行うことができほっとしました。新型コロナウイルス感染症の流行によって、様々な行事が中止・変更になってきたこの3年間ですが、宿泊行事の実施により、少しずつ学校生活も日常を取り戻しつつあることを実感します。もちろんバスは感染対策で間隔を開けて座りますし、バスレクもありません。手洗いや消毒をしながらの活動です。常に感染予防を意識しての宿泊体験学習でしたが、子ども達の生き生きとした姿が印象的でした。4年生と5年生が協力して、リーダーを中心にカヌーの体験やクラフト作成に取り組みました。場面に応じて活動班だったり、学年ごとだったり、バスの号車ごとだったり部屋班だったり、グループも変わります。これらの動きも1日目、2日目と時間がたつとともに目に見えて速やかに、混乱なく動けるようになっていました。

「百聞は一見にしかず」といいますが、まさに活動を通して学んでいる姿を目の当たりにしました。私も、キャンプファイヤーでは子どもたちに「自由」「勇気」「友情」の火を授ける火の神になったのですが、キャンプファイヤーが終わってロッジに戻る途中で「先生、火の神よかったです。」と声をかけてくれた子がいました。火を囲んで踊ったり、歌ったり、コントをしたり。非日常の活動の中で、子ども達一人ひとりが何かを感じているのではないかと思います。学校の教育活動では教室の外で学べるがたくさんあるのだと改めて思いました。

体験は子ども達にとって教室で教科書を開いて行う学習とは全く違った学びをもたらします。そこで得たものは記憶に残り続けます。私は小学生のころ、理科が大好きでした。今でも鮮明に覚えているいくつかの体験があります。授業で、校庭の石を拾ってくるように言われました。グループごとに十数個の石を拾ってきて、これを観察して気付いたことを書くように言われ、みんなで虫眼鏡を使って必死で石をひねくり回していました。じっくり観察していて気付いたことは、「きらきらする物が混じっている石と混じっていない石がある。ぼこぼこした石（穴の開いている石）とそうでない石がある」ということです。そこからたどり着いたのが、きらきらしているのは石英で、石英が入っているのは火山岩、きらきらしていないのは堆積岩ということでした。ある時は、木が生い茂っている森の中で、上を見上げて気付いたことを書くように言われました。見上げると、木には葉が生い茂っており、木漏れ日を受けてキラキラと輝いていました。とってもきれいだなあと覚えているのを覚えています。気付いたことは、「森の木は、南側は葉が多いけど北側は少ない。」でした。そこからたどり着いたのは、植物は光合成をするということでした。みんなで考えて議論して、得られた答えは半世紀近く前の学びですが今でも鮮明に覚えています。体験を通して思考し、仲間と協働して主体的に学ぶ。総合的な学習の時間での学びも同様です。そう考えると、学びの基本はそんなに変わっていないのかもしれませんが、新治は児童の学びの素材の宝庫だと思います。これらの素材を通して児童が豊かな学びを展開できるように取り組んでいければと思います。

